

清水隆慶作「髑髏」の経穴

猪飼祥夫

一 はじめに

平成二十年の正月に京都国立博物館を訪ねた。特別展を見終わって、平常展示を拝見すると特別陳列で「仏師 清水隆慶―老いらくのでんごう―」という企画が催されていた。そこに髑髏があつて、何気なく良くできているなど見ていると、その頭蓋に経穴が描かれている。これはなにか大変重要なものを発見したように思われて、見学を申しこんだ。今回、博物館より見学を許されて、髑髏と経穴に対しての基礎報告をすることとなった。

二 髑髏の制作年代

清水隆慶によって作られた髑髏は、最近京都国立博物館に寄託されたものである。この髑髏が保存されていた箱底には制作年代が書かれていた。

「元禄第二己巳、

一刻千金陽天

花朝中旬隆慶

作靈天蓋骨形。

清水右近隆慶令 花押」

元禄二年己巳（一六八九）春二月中旬に作られている。作者自身の署名と花押によって制作年代は確かなものである。清水隆慶は京都の仏師で四代まで続いた。この髑髏は初代の麟岡（りんこう）（一六五九―一七三二）の作品である。^①

またこの箱の蓋裏には癖のある草書が書かれている。そこには彫刻された髑髏が頭蓋骨を髣髴するものであったことが述べられているが年代表記はない。また後で述べるが鍼灸に關係する語彙はなかった。

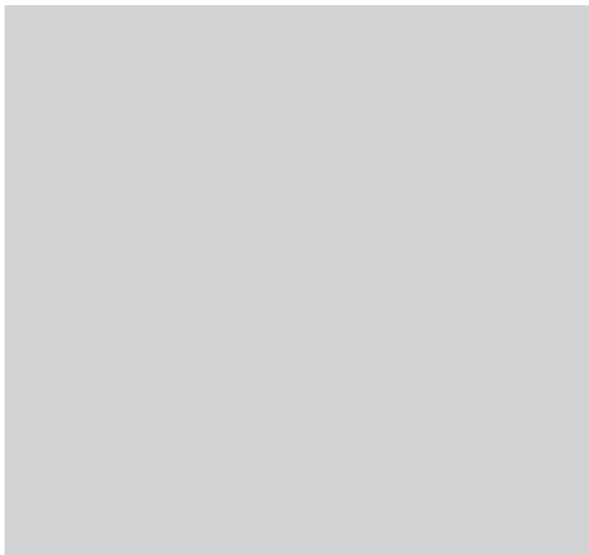
仏師の清水隆慶が仏像以外のものを制作するのは彼自身が「老いらくのでんごう」といつて作った「百人一衆」製作（一七一七）に始まるとされるが、すでにこの髑髏にその兆しが見られる。^②「てんごう」とは、いたずら、道楽、わがままを指す言葉である。

三 髑髏の解剖学的特徴

髑髏は骨格の全体模型ではなく、頭蓋骨と下顎骨の木彫である。全体のスケールは、実際の骨標本の三分の二ぐらいの大きさである。木質は不明である。彫刻は中心部に張り合わせの痕跡があるので寄木で作られていると考えられる。木彫の上に胡粉が塗られている。すでに胡粉は全体的に剥がれたり磨りへったりしている。

外見は非常に骨標本に似ている。明確な冠状縫合、矢状縫合、ラムダ縫合、鱗状縫合、後頭乳突縫合、錐体鱗縫合が彫刻されている。(挿図1) 鼻骨上顎縫合、前頭上顎縫合、上顎間縫合などは浅い彫りで表現されている。頭頂骨、前頭骨、後頭骨、側頭骨、蝶形骨、頬骨、上顎骨などは、精確で縫合によって明確に区分されている。鱗状縫合では鱗状端がやや肥厚しているように彫刻されている。(挿図2) この肥

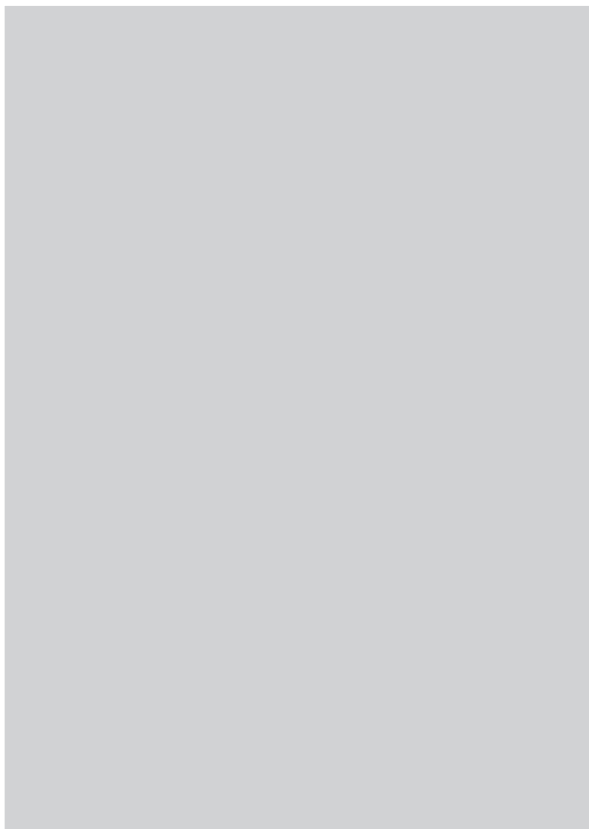
厚は加齢によって鱗状縫合が癒合し現れるものであるので、老人の頭蓋骨を表現している。頭頂部の縫合ではしっかりと縫合の特徴を表現するために、小さな



挿図1 矢状縫合・ラムダ縫合

孔を縫合面にかけて実際の彫刻となっている。頭蓋下面は非常に精確に表現されている。口蓋部は後鼻孔、正中口蓋縫合、切歯孔、大口蓋孔など、破裂孔、棘孔、卵円孔、大後頭孔、乳様突起なども非常に精密に彫刻されている。(挿図3)

顔面頭蓋では骨の分離性は高くないが、形態は骨標本に近似する。眼窩



挿図3 頭蓋骨底部 (一部画像処理)



挿図2 冠状縫合・鱗状縫合

には上眼窩裂、下眼窩裂も刻まれている。また眼窩下溝、視神経管、眼窩下孔、前涙囊稜なども見られる。鼻部の彫刻は少し単純化している。鼻孔内には下鼻甲介が彫られている。頬骨弓はやや強調されている。

上顎骨は繊細な表現で、歯は現実みを帯びた形をしている。上顎骨頬骨突起はやや強調されている。口蓋については頭蓋下面で述べたごとく、非常に正確である。歯の数は上歯六本、下歯で六本、残存する歯は差しこみに構造になっている。右側に上顎に、第二大臼歯、第一大臼歯、第二小臼歯、第一小臼歯、下顎に、第二大臼歯、第一大臼歯、第一小臼歯、中切歯が見られる。左側は、上顎に第一大臼歯、第二大臼歯、犬歯、下顎には第一大臼歯、第二大臼歯、犬歯がある。

差しこみの構造は不明である。抜け落ちた歯槽部分の表現もそれぞれに確かなものである。歯槽部と歯牙部の結合は当時の義歯制作との関係を論じる必要がある。日本では長い間義歯が仏師の手で作られていたといわれているので、清水隆慶も義歯製作にかかわっていた可能性があると思われる。⁽³⁾ 歯槽突起も綺麗に彫られている。オートガイ孔は左右対称に刻まれていて、右の孔はやや後方に向かって空けられている。この表現は解剖学的特長を持っており、少なくとも現実の骨標本を見なければできないと考えられる。下顎骨は、別に彫刻され頭蓋に耳穴を使って紐で繋がれている。博物館寄託時には右下顎骨部の一部破損を修理したと言うことである。下顎関節の構造は、実際の骨標本にちかい。下顎は上顎との組み合わせに調和している。歯の抜け落ちた表現から、この髑髏のモデルとなった現実の骨標本は、老人のものだったと考えられる。さらに筋突起は細

く丸くなり、老人様の概形を呈している。下顎角も老人様の角度を呈している。実際に計測すればこの髑髏の元となった標本の年令推定につながると思われる。

四 髑髏に現れた経穴

この髑髏が何のために作られたか明確ではない。しかし髑髏の上に鍼灸のツボ、すなわち経穴が漢字で表示されていることから、後の時代に鍼灸の経穴模型として利用されたことは確かである。

通常、鍼灸の経穴を表示した人形を、経穴人形もしくは銅人形と呼び慣わしている。江戸時代には紙製や木製の経穴人形が多く作られているが、それらも銅人形と呼ばれることが多い。⁽⁴⁾ 銅人形と呼ばれるゆえんは、北宋の天聖四年（一〇二六）に銅で経穴人形が作られ、この解説書である『銅人腧穴鍼灸図経』が著されたことによる。⁽⁵⁾ 後世その形式の経穴人形が鍼灸経穴模型として広く普及したためである。この宋代の銅人形はその後失われたが、明の正統八年（一四四

三）に宋の銅

人形を模して

銅人形が作ら

れた。⁽⁶⁾（挿図4）

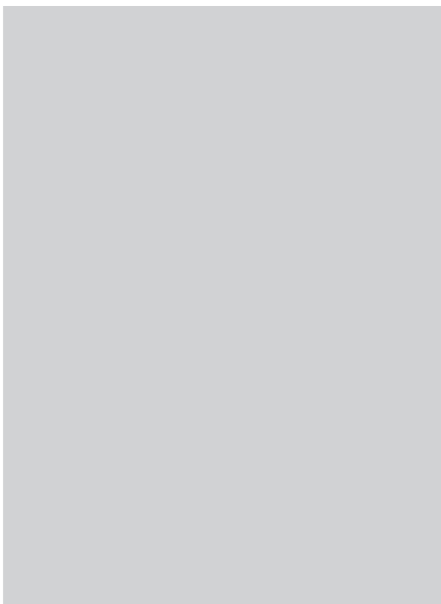
鍼灸の図譜

は古い時代か

ら作られたよ

うで、『隋書

経籍志』にも



挿図4 明の正統八年（1443）の銅人形顔面部

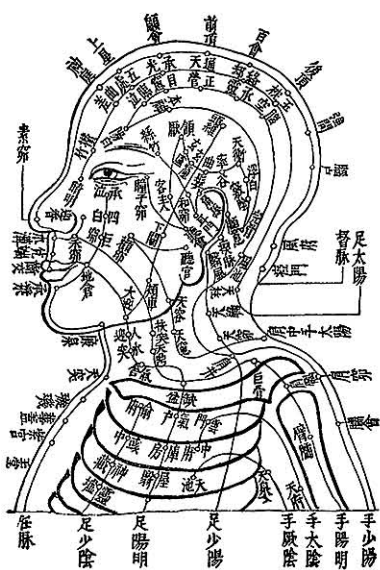
『黄帝明堂偃人図』十二卷、『扁鵲偃側鍼灸図』三卷、『偃側人経』二卷秦承祖撰、『黄帝十二経脉明堂五藏人図』一卷などが記録されているが、その図は失われたようである。『旧唐書経籍志』にも『龍銜素針経并孔穴蝦蟇図』三卷、『黄帝十二経脉明堂五藏図』一卷、『黄帝十二経明堂偃側人図』十二卷などが記載されているが、伝来しているものはない。この時代のものでは敦煌遺書の灸図が注目される。フランス国家図書館のペリオ文書P2675、イギリス大英図書館のスタイン文書S6168、S6262などに経穴が表示された図がある。⁽⁷⁾大谷文書O8096にも同様の図がある。⁽⁸⁾同時代のものでは日本の『医心方』巻二十二婦人部に経絡が書かれた図がある。⁽⁹⁾この書物は永観二年(九八四)に丹波康頼が中国の医学書を引用して作られたものである。これらの図は稚拙で経穴も法則性によって記述されたものではない。

宋代になると医書の校勘出版が行われ、鍼灸関係書も続々と出版された。『太平聖恵方』(九九二)の鍼灸門には多くの鍼灸図がある。⁽¹⁰⁾しかしその図も現代のものとは大きく隔たり、取穴のための図というより位置を単に示すに過ぎないものである。『銅人腧穴鍼灸図経』(一〇二六)によって銅で経穴人形が作られその位置が明白なものになると、正式な経穴図として確定した。またこの書物は石に彫られて太医院の前に立てられていたので、明代になっても標準経穴書としての地位を保っていた。⁽¹¹⁾元には滑寿(一三〇四〜八六)の『十四経發揮』(二三四二)や竇桂芳の『新刊黄帝明堂灸経』(三三一一)なども『太平聖恵方』『銅人腧穴鍼灸図経』の影響下にできたものである。明代には多くの鍼灸書が出版されている。『鍼灸大全』(一四三九)『鍼灸聚英』(一五二九)『鍼灸大成』(一六〇二)

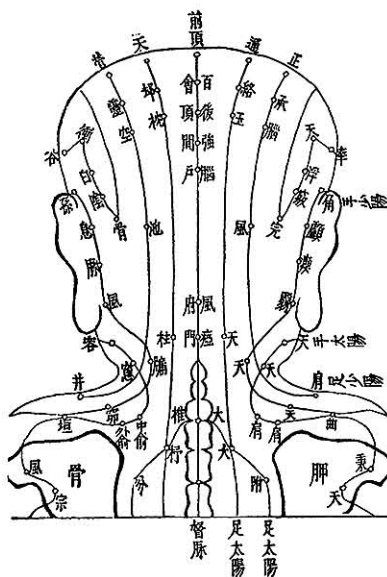
などにも経穴図がある。

日本では竹田昌慶が「永和四年(一三七八)医家秘書及び銅人形等を得て帰朝す」と、明から銅人形をもたらししている。⁽¹²⁾この人形は現在消失しているが、明の銅人形が伝来したことは間違いない。その後、この髑髏と同時代の銅人形がある。東京国立博物館に蔵される寛文二年(一六六二)ごろに作られた重要文化財の銅人形である。この銅人形は、銅で網目状に体表面を覆っている。表面には経路経穴が銅線で表示されている。体内には木製の五臓六腑が収められていた。さらに木製の骨が組み込まれている。内部は網目を通して見ることができ、体内を見るための窓が備え付けられている。同様のものがドイツのハンブルグ州立民族博物館に蔵されているということである。それは寛文九年(一六六九)に和歌山藩医であった飯村玄斎が関わって制作されたことが知られている。⁽¹³⁾この銅人形には写真で見える限り前腕部の木骨が二本になっている。橈骨と尺骨である。鍼灸経穴図では伝統的に前腕部の骨は一本に描かれている。同様に下腿部でも骨が二本に作られている。脛骨と腓骨である。この部分も伝統的には骨は一本に描かれる。『解体新書』が広く行き渡るまで、一般的には前腕部や下腿部の骨が二本であるとは認識されていなかった。しかしこの銅人形には、二本に作られているので、製作者は西洋医学の解剖図を見たに違いない。その解剖図譜がどのようなものであったかは不明である。このように経穴図と銅人形は、互いに影響しながら発展してきた。

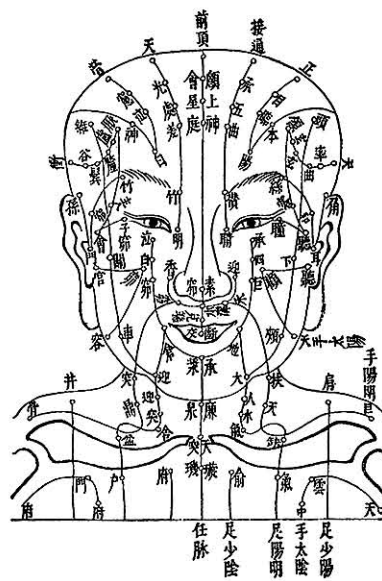
さてこの髑髏には、すでに述べたように解剖学的特徴を備えている。その多くは当時の伝統的な人体知識では制作できない要素を持っている。髑髏の製作時期と経穴の穿鑿時期が同時であるかどうか



挿図7 『類経図翼』側頭部



挿図6 『類経図翼』後頭部



挿図5 『類経図翼』顔面部

かは不明であるが、この髑髏の上に現れた経穴を検討する。

髑髏の経穴名は督脉の経穴を除いて、左右に一字ずつ分けて表記されている。この表記は『類経図翼』（一六二四）に見るように経穴の伝統的な表記方法である。⁽¹⁵⁾（挿図5〜7）髑髏では『類経図翼』と同じように、顔面前部では右から左に経穴名は記入されて、後頭部でも右から左に書かれている。この経穴名を

読むためには半回転をする形になる。また髑髏では経穴が穿たれるが、『類経図翼』にみるような経絡の線は画れない。

髑髏に表記された経穴は以下のものである。名称が記入されているものはそのまま、名称が記載無しは（ ）で表示する。経穴は異体字もあるため、標準教科書表記にする。⁽¹⁶⁾ 経穴表記図参照（挿図8〜12）。

頭部の経穴

- 1、神庭（経穴あり、名称あり）
- 2、曲差（経穴あり、名称あり）
- 3、（本神）（経穴あり、名称なし）
- 4、（頭維）（経穴あり、名称なし）
- 5、上星（経穴あり、名称あり）
- 6、額会（経穴あり、名称あり）
- 7、前（頂）（経穴あり、名称あり、頂の字無し）
- 8、百会（経穴あり、名称あり）
- 9、後頂（経穴あり、名称あり）
- 10、強間（経穴あり、名称あり）
- 11、腦戸（経穴あり、名称あり）
- 12、（風府）（なし）
- 13、五処（経穴あり、名称あり）
- 14、承光（経穴あり、名称あり）
- 15、通天（経穴あり、名称あり）
- 16、絡却（経穴あり、名称あり）
- 17、玉枕（経穴あり、名称あり）

- 18、(臨泣) (経穴あり、名称なし)
 - 19、(目窓) (経穴あり、名称なし)
 - 20、正営 (経穴あり、名称あり) (営が榮の字である)
 - 21、承靈 (経穴あり、名称あり)
 - 22、(腦空) (経穴あり、名称なし)
 - 23、(瘧門) (なし)
 - 24、(天柱) (なし)
 - 25、(風池) (なし)
 - 26、天衝 (経穴あり、名称あり)
 - 27、率谷 (経穴あり、名称あり)
 - 28、角孫 (経穴あり、名称あり)
 - 29、曲鬢 (経穴あり、名称あり) (鬢の字は一部墨字で訂正されている)
 - 30、(顙息) (不明)
 - 31、(瘕脈) (不明)
 - 32、(翳風) (不明)
 - 33、浮白 (経穴あり、名称あり)
 - 34、竅陰 (経穴あり、名称あり)
 - 35、完骨 (経穴あり、名称あり)
- 顔面部の経穴
- 1、(素膠) (なし)
 - 2、水溝 (経穴あり、名称あり)
 - 3、(兌端) (なし)
 - 4、(齟交) (経穴あり、名称なし)
 - 5、(承漿) (経穴あり、名称なし)

- 6、攢竹 (経穴あり、名称あり) (「竹」のところに「明」の誤記、上から消去している)
- 7、晴明 (経穴あり、名称あり) (「晴」が「清」である)
- 8、(迎香) (経穴あり、名称なし)
- 9、禾髎 (経穴あり、名称あり) (髎は窠と書かれる)
- 10、陽白 (経穴あり、名称あり)
- 11、承泣 (経穴あり、名称あり) (鉄筆書きでなく墨書)
- 12、(四白) (経穴あり、名称なし)
- 13、(巨髎) (経穴あり、名称なし)
- 14、(地倉) (なし)
- 15、大迎 (経穴あり、名称あり)
- 16、(絲竹空) (なし)
- 17、瞳子髎 (経穴あり、名称あり) (髎は窠と書かれる)
- 18、(顴髎) (経穴あり、名称なし)
- 19、頤厭 (経穴あり、名称あり)
- 20、懸顙 (経穴あり、名称あり)
- 21、懸釐 (経穴あり、名称あり)
- 22、(上関) (不明)
- 23、(下関) (経穴あり、名称なし)
- 24、頰車 (経穴あり、名称あり)
- 25、(耳門) (経穴あり、名称なし)
- 26、(和髎) (不明)
- 27、(聴会) (不明)
- 28、(聴宮) (不明)



插图11 髑髏頭頂部

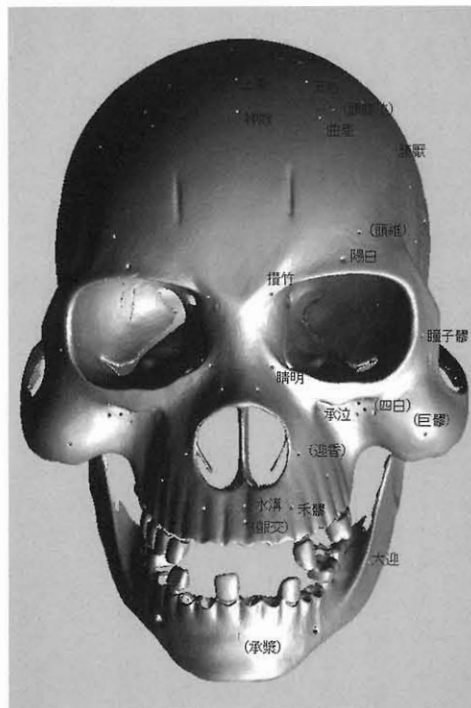


插图8 髑髏顏面図

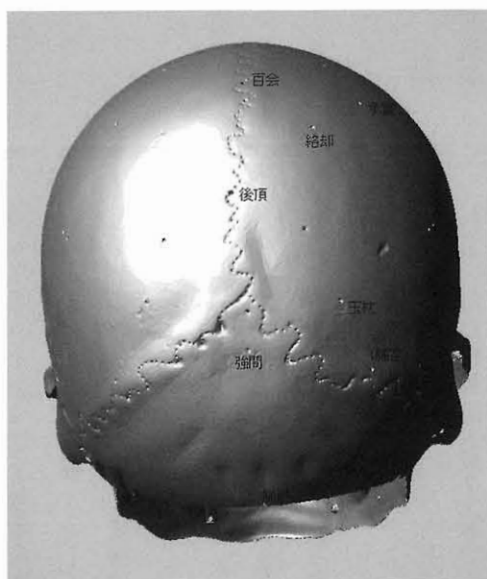


插图12 髑髏後頭部

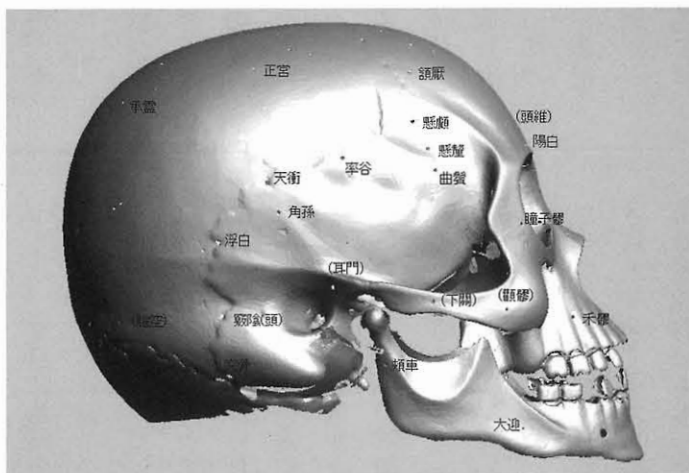


插图9 髑髏右側頭図

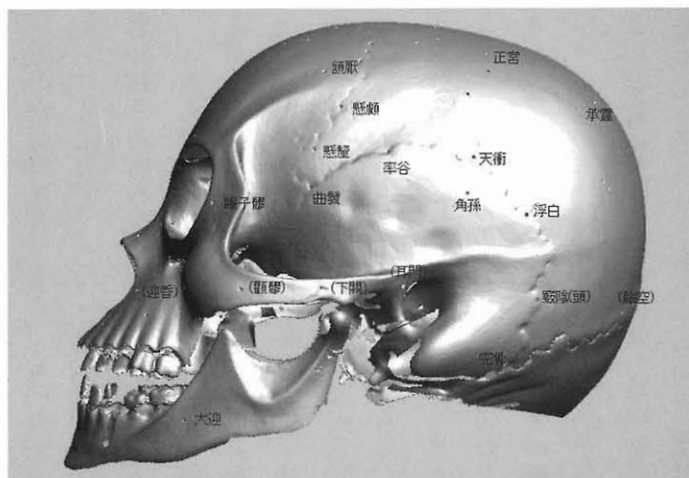


插图10 髑髏左側頭図

五 髑髏と経穴

この髑髏は、非常に精確な解剖学知識に基づいた作品である。その背景を探ると今日知られている当時の医学知識と大きく相違する側面が現れる。

ヨーロッパ伝来の医学は、最初スペインやポルトガルのキリスト教の接触から始まった。この時代の医学は南蛮流医学と呼ばれている。その後、ヨーロッパの通商が寛永十九年（一六四二）に、長崎の出島で、オランダだけに限定される。それ以後の医学を南蛮流医学と区別して紅毛流医学と呼ばれている。⁽¹⁷⁾⁽¹⁸⁾ この時代の南蛮流から紅毛流の医学の時代の伝来医学は外科を中心としたものであった。たとえばレメリンの「人体解剖図譜」（オランダ語訳一六六七）が、本木正太夫（一六二八〜九七）の部分訳の『阿蘭陀経絡筋脈臟腑図解』となったのは天和の初め頃（一六八一〜八二）だった。原三信も貞享四年（一六八七）に同図を写している。⁽¹⁹⁾⁽²⁰⁾ 後に鈴木宗云の手によって『和蘭全軀内外分合図』（一七七二）として出版された原典である。しかしそれらの解剖図解も一部の人のみのものであっただけでなく、腹部だけのものであった。この図譜の翻訳は『解体新書』の出版より九十二年前のものであるが、その内容はまだまだ充実したものではなかった。さきに述べた飯村玄斎らが寛文年間に制作した銅人形にも西洋医学的知識が伝来している。しかしそれも一部の人だけのもので、清水隆慶の髑髏が作られた一六八九年には、まだ西洋の解剖学書は行き渡っていなかった。『解体新書』の出版が一七七四年であるので、それまでに正しい形態の頭蓋骨は一般的には

知られていなかったと考えられる。⁽²¹⁾

根来東叔（一六八九〜一七五五）が烙刑に処された二人の男性の遺骨を観察してまとめた寛保元年（一七四一）の『人身連骨真形図』や山脇東洋（一七〇五〜六二）の解剖（一七五四）による宝暦九年（一七五九）出版の『蔵志』をみても、当時最先端の医家達の解剖学的知識をしても、稚拙な図譜しかできなかったのである。⁽²²⁾⁽²³⁾ 『解体新書』が出て、やっと精確な解剖学的知識が広がっていったのである。

木製の骨格模型を木骨と呼び慣わしている。人骨の所持が禁止されていたため骨標本を木製で作ったとされている。⁽²⁴⁾ 広島星野良悦（一七五四〜一八〇二）が寛政三年（一七九二）に解剖と骨標本をつくり、それに基づいて作ったのが星野木骨である。また大阪の各務文献（一七五四〜一八一九）の文化七年（一八一〇）『整骨新書』上梓時には作られていたと思われる各務木骨である。各務の弟子奥田万里も木骨を作っている。⁽²⁵⁾ これらは全身の骨格模型である。頭蓋骨模型も精巧に作られているが、清水の髑髏に比べて百年以上も後の制作である。各務が作った木骨の頭蓋骨と清水隆慶の髑髏を比べてもまったく遜色がなく、髑髏のほうがより詳しい解剖学的表現さえ見られる。⁽²⁶⁾ その解剖学的内容はすでに述べたとおりである。

この髑髏を収めていた箱の前述の二つの文章には、経穴のことは何も述べられていない。そこでこの髑髏がなにの目的で作られたかということになる。一つの考え方はまず髑髏が作られて、その後になつてこの髑髏に経穴を表示するために穴が穿たれ、経穴名が記入されたという考えである。この認識に立つなら、髑髏はなにか宗教的な意味合いをもって作られたのであろう。もう一つの考え方は、

この髑髏が経穴を表示する目的で作られたという見方である。しかし、そのことは箱に書かれた二つの文章には全く触れられていないので不明である。もしかしたら経穴が穿鑿されたのは、少し時間をおいてであったかもしれない。

経穴がどのようにしてこの髑髏に刻みこまれたかを観察してみよう。髑髏の木彫と経穴が穿たれた時間には問題があり、先に別の目的で髑髏が作られてから、鍼灸の学習用に転用されたのかも知れない。ここでは経穴が作られてからの問題を考えてみたい。多分経穴が穿鑿されて後、全体に胡粉が塗られ、その上にたぶん墨で経穴名が記されたのではないかと考えられる。眼窩下部の承泣にその痕跡がある。ところがこの髑髏を鍼灸の学習のために長年多度に亘って手に持って触ったために胡粉が剥けたのである。そのために墨書の経穴名が削れてしまったのである。そこで後になつて鉄筆のようなもので経穴名を描き直したのではないだろうか。承泣の墨字は非常に端正な楷書である。(挿図13)しかし鉄筆の刻字は決して上手ではないし、字も間違っていることもある。鉄筆様のものでは記入年代は不明である。

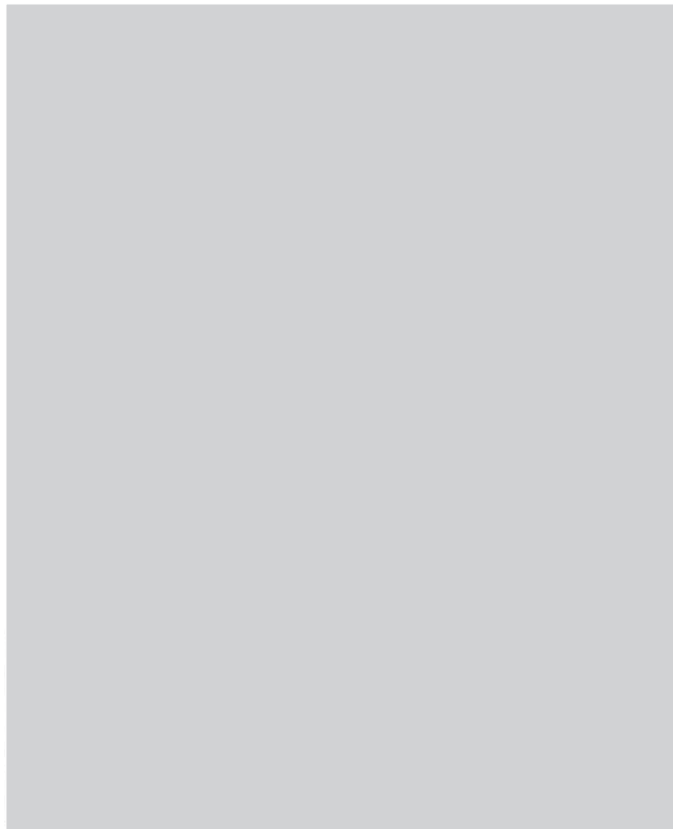
さらにこの髑髏の経穴



挿図13 承泣の墨字

は、臨床学的に非常に有用な視点で作られている。髑髏が非常に正しい骨指標に基づいているので経穴も厳密に表示している。この経穴を経穴書から髑髏の上に同定した人は、相当な経穴学的知識と臨床経験の持ち主であつたと考えられる。例えば日本で紙製の人形では古い部類に属する内藤記念くすり博物館蔵の元禄五年(一六九二)の銅人形(挿図14)と比べて、この髑髏の経穴がいかに精確であるか一目瞭然である。⁽²⁷⁾飯村玄斎ら関わった銅人形(一六六九)に比べても実用性から見れば、この髑髏のほうが高い。

先に上げた『類経図翼』と比べてもこの髑髏の経穴は非常に明白なものとなっている。『銅人腧穴鍼灸図経』によれば銅人の目的は、銅人を触手して孔を指先で摸ることによって経穴を当てる経穴の学



挿図14 内藤記念くすり博物館蔵元禄五年の経穴人形

習にある。この髑髏も同様の使われ方をして胡粉が剥げたものであろう。

鱗状縫合に沿う胆経の率谷、天衝、浮白などは穴が垂直に錐で穿つてないでやや斜め下方に向けて開けている。(挿図2参照)このような操作をしている経穴がいくつかある。すなわち鍼医が鍼で刺す方向を示しているのである。眼窩部の睛明は、今日では内眼角に取穴をするが、この髑髏では内眼角の下方にある。(挿図15)その文献根拠を調べたがわからない。ただ明の正統時代の銅人には同様の位置が示されている。⁽²⁸⁾(挿図4参照)この位置は、また臨床的に有用であるように思われる。

経穴の表記形式を検討してみると、顔面部の軟部組織上にある経穴は明示されない。兌端(上唇の中央)、素窠(鼻の上端)、地倉(口角)などはその例である。

これらの経穴は軟部組織であつたので、布や綿などのなにか別の方法で表示されていたかもしれない。また経穴名が表記されない経穴が多くある。穴の開いた経穴と思われる部位に、適当な経穴名が相応する名前が不明なものが多くある。その経穴にはなにか典拠があるように思うのだが今回文



挿図15 睛明の位置

献に発見できなかった。奇穴と呼ばれる経絡上以外の経穴についてはこの髑髏には表記されていない。

清水隆慶がこの髑髏をつくる目的が最大の謎となる。彼の交友親戚関係をより詳しく特定できれば、この髑髏制作の具体的背景がより明確になるかもしれない。

六 結語

初期的観察を通じて、この髑髏の医史学的に非常に重要なものである。解剖学的見地からは、このような髑髏を制作できた医学的背景が問題となろう。また解剖学的指標が正しく表示されていることも重要である。人体スケールを縮尺して正しく描写できた理由も問題となろう。山脇東洋(一七〇五〜六二)の最初の解剖図『蔵志』や、杉田玄白(一七三三〜一八一七)の『解体新書』の出版などより早い人体模型としても重要である。

蘭学研究史からは西洋医学の伝来時期との関係が問題となろう。寛文九年(一六六九)に飯村玄斎ら関わった銅人形とこの髑髏を比較研究する必要がある。この時期は南蛮医学から紅毛医学への過渡期であり、どのように西洋医学の影響があつたかを検証しなければならぬ。西洋からすでに解剖学書が伝来していたと思われるが、それらの図像が和歌山や京都の極少数のこれらの作者に伝わっていたか。西洋の解剖図とこの髑髏との比較によって、この人体模型の知識がどのようなもの基づくかも重要になると思われる。さらに後の木骨との関係も重要である。園田真也の指摘よれば眼瞼部の神経、血管の正確な把握が眼科的に注目され、西巻明彦によれば口腔部の

構造は、仏師の義歯制作との関連において歯科学的にも検討課題となるということである。

鍼灸医学史的には、経穴の位置が今年国際標準となって決定されたWHOの経穴位置と大きく異なっている。明の銅人像などと比べても、非常に明白な位置表示となっている。江戸期の経穴人形と比べても、明らかに精度がたかい。臨床学的にも妥当性が高い経穴部位を示している。頭部の経穴は中国では明代まで男性でも長髪であつたためにあまり利用されていなかった。日本でも鬘を結っていたので必ずしもいつも臨床に用いられていたとは限らない。女性は日中とも長髪で鬘を結っていた。そのために頭の経穴は臨床的に未開発である。経穴の位置表示も未確定なところも多い。そのための一つの指標となる標本である。今後より詳しい研究が求められる必要がある収蔵品と考えられる。

〈註〉

- 1 「新春特集陳列」仏師清水隆慶―老いらくのてんごう―平成二十年一月二日～三月三十日 京都国立博物館 平常展示パンフレット二〇〇八
- 2 切畑健「清水隆慶と「百人一衆」」『日本美術工藝』三三三日本美術工藝社一九六五 九六～一〇三頁
- 3 石井拓男等『スタンダード歯科医学史』学建書院 二〇〇九 七二～七三頁
- 4 長野仁編『鍼のひびき灸のぬくもり―癒しの歴史―』内藤記念くすり博物館 二〇〇二 二四～二五頁
- 5 『訓注銅人腧穴鍼灸図経』丸山昌朗訓注 續文堂 一九七四
- 6 正統八年（一四四三）の銅人はロシアのエルミタージュ美術館に収蔵されている。黄龍祥編『中国鍼灸史図鑑』青島出版社 二一五～二二五頁

- 7 王淑民「豊富多彩の中医古書挿図」『形象中医』人民衛生出版社 二〇〇七 三二～三三頁
- 8 猪飼祥夫「大谷文書の漢文医書類の概要と整理」『仏教文化研究所紀要』第四十六集 二〇〇七 一〇五頁
- 9 丹波康頼『醫心方』新文豊出版社（台湾）一九七六（安政版の影印）
- 10 『太平聖恵方』巻九九～一〇〇人民衛生出版社 一九八二
- 11 王淑民等『形象中医』人民衛生出版社 四六～四七頁
- 12 黄龍祥編『中国鍼灸史図鑑』青島出版社 二〇九～二一四頁
- 13 富士川游『日本医学史』日新書院 一九四一 一四二頁
- 14 国宝http://www.emuseum.jp/top?d_lang=ja 重要文化財 指定名称・銅人形 一軀 銅造 高143・9 江戸時代・十七世紀 松平頼英氏寄贈 東京国立博物館 C1544
- 15 張介賓（明）『類経図翼・類経附翼』人民衛生出版社 一九八〇
- 16 『新版経絡経穴概論』日本理療科教員連盟編 医道の日本社 二〇一〇 第二版
- 17 宗田一『日本医療文化史』思文閣出版 一九八九 一二三頁
- 18 ヴォルフガング・ミヒェル「初期紅毛流外科と儒医向井元升について」『日本医学雑誌』第五六巻第三号（二〇一〇年九月）三六七～三八五頁
- 19 宗田一『日本医療文化史』思文閣出版 一九八九 一四二～一四三頁
- 20 日本医史学会編『資料でみる近代日本医学のあけぼの』便利堂 一九五九（一九七三再版）解説一二～一四
- 21 日本医史学会編『資料でみる近代日本医学のあけぼの』便利堂 一九五九（一九七三再版）解説十六
- 22 宗田一『日本医療文化史』思文閣出版 一九八九 一五九～一六四頁
- 23 ヴォルフガング・ミヒェル「屍骸を観る―根来東叔の「人身連骨眞形図」とその位置づけについて」『中津市歴史民俗資料館 分館 医家史料館叢書』第一号、中津市、二〇一二年三月、四二～八九頁。
- 24 宗田一『日本医療文化史』思文閣出版 一九八九 一三八頁
- 25 宗田一『日本医療文化史』思文閣出版 一九八九 二三八～二四二頁

	頁
26 日本医史学会編『資料でみる近代日本医学のあけぼの』 便利堂 一九五九（一九七三再版） 図版・解説一〇二～一〇三	
27 長野仁編『鍼のひびき灸のぬくもり―癒しの歴史―』内藤記念くすり博物館 二〇〇二 二四～二五頁	
図版写真は内藤記念くすり博物館の提供による。	
28 黄龍祥編『中国鍼灸史図鑑』青島出版社 二二〇頁	

〔謝辞〕

この度の嚮嚮研究の機会を与えて頂きました京都国立博物館の浅湫毅先生、眼科学領域には園田真也先生、歯科学領域には西巻明彦先生、法医学領域には坂部昌明先生の貴重な御指摘と意見をいただいたことを深く感謝しております。箱蓋裏の古文書解説には町泉寿郎先生の読解指教をうけたことを報告し深く感謝いたしております。元禄五年の経穴人形には内藤記念くすり博物館の野尻佳与子先生の写真撮影と資料貸与に協力いただいたことを深く感謝しております。